

言語文化教育研究学会 第9回研究集会(オンライン開催)
トキメキー Sparkling Joy

2021年8月28日(土)、29日(日)、オンライン(ZOOM)で第9回研究集会が行われました。「トキメキー Sparkling Joy」というテーマの下、3月のプレ企画から、委員、参加者がセッションを考え、話題提供者となってともに研究集会をつくっていく新たな試みに挑戦しました。

プログラム

<http://alce.jp/meeting/09/program.pdf>

研究集会公式サイト

<http://tera92.sakura.ne.jp/alce202012/>

<参加申し込み者内訳>

会員 21 名

非会員 38 名

委員 9 名

計 68 名

研究集会では、「1. 対話を重視した集い」、「2. 様々なカタチ」をキーコンセプトにしています。これまでは、大きく、ゆるやかなテーマに関する発表を募集し、応募発表を中心に対話をしてまいりました。今回の研究集会では、この2つのキーコンセプトに加えて、この「対話」のプロセスを一步進め、発表の発題のアイデア、「問い」から、みなさんと共に考えていくことから始めました。

プログラムも口頭発表ではなく、話題提供者によるセッション、という形をとり、各セッションの話題提供者にセッション運営をしていただきました。また、1セッション 90 分、という長い枠で行ったことで、どのセッションにおいてもゆっくり対話をすることができたのではないかと思います。

各セッションの詳細は、委員による下記報告をお読みください。

第9回研究集会実行委員

委員長 佐野香織

副委員長 瀬尾匡輝 後藤賢次郎

プログラム作成 樋佳世

テクニカルサポート 大隅紀子

WEB サイト作成 寺浦久仁香

話題提供・運営 米本和弘 両角遼平 倉沢郁子 小西達也

8月28日(土) 第一日目報告

倉沢 郁子(関西外国語大学)

『トキメキ - Sparkling Joy?』 またまた～(笑) 私が最初にこのタイトルを見た時の感想である。実はこのタイトルを見た時、まだ委員として研究集会に関わっておらず、「ALCEの研究集会は、またおもしろいテーマで切り込むなあ」と思っていた。このテーマへのワクワク感が引き寄せたのか(?!)、今回から研究集会委員として関わることとなった。

そして迎えた研究集会初日、開始の時間。Zoom ルームがオープンし、参加者のみなさんが入っていらした。「トキメキ」を感じるものをバーチャル背景に…とお願いしていたが、断食道場での食事の写真、アンデス山脈の写真、わんちゃんや近くの国立公園、雪の中の大学のキャンパスの写真… みなさんのいろいろな「トキメキ」。もっとお話しをお伺いしたいが、楽しみはまた後で。まずは大会趣旨説明。

本研究集会は、話題提供セッションと、3月のプレ企画から生まれた企画を合わせて行われた。話しの中からでてきた「トキメキ」が何に例えられ、それはどこにあったのか、あるのか、どこに繋がるのか、過去、現在、未来、どこにその「たね」が飛んでいくのか、飛ばしていくのか、そしてどんな花に、実になっていくのか、この研究集会後に参加者のみなさんの前にはどんな風景が見えるのだろうか。私自身も楽しみである。

<セッション1> 「トキメキ・チャレンジを語ろう」

集会最初のセッション「トキメキ・チャレンジを語ろう」では、参加者が「一週間のトキメキチャレンジ」をするというもの。発表者のお一人である松本先生が、コロナ禍でオンライン授業になった時、学生が大学との繋がりが感じられないまま過ごすのではと思い、「GW チャレンジをしてみよう！」と学生に投げかけた。すると、学生それぞれが多才な個であるとわかり、お互いを知るいいきっかけになったことが本発表企画につながったという。

参加者からは、チャレンジをし続けたことで意識が変わったと感じた、継続することが難しいという報告があった。この経験を教育実践に結びつけられているかという問いも投げかけられた。そもそも教育に「トキメキ」は必要？その前に、「トキメキ」って何？立ち返って出てきたキーワードは、「発見」、「驚き」、「大人でも知らないこと」などなど…。

チャレンジは日本語で「挑戦」。背伸びしたり頑張ったりしないとできないこと。参加者のチャレンジが気合の入ったチャレンジだったのか、めんどくさいなあと思いながらのチャレンジだった

たのかはわからないが、チャレンジに向き合う中で見つけた「発見」や「驚き」を語り合うことで、私自身は新しい視点や、グループメンバーの世界に触れることができた。そして、私ももうちょっと何かに挑戦してみようかなと思った。そう考えると、体験を言語化することの大切さも改めて実感したように思う。「トキメキ・チャレンジ」とは、トキメキの連鎖を生むものなのかもしれない。

<セッション2> 「ウェルビーイング x 対話」x ことばの教育

—対話を通して幸せな心の状態(well-being)を育むワークショップ—

セッション2は、荻野先生の「ウェルビーイング」のセッション。セッション開始後、早速「Good & New」というグループワーク。この24時間以内に起きた良いことや発見をグループでシェアした。各グループには認定ウェルビーイング・ファシリテーターが入ってくださった。誰かの発言の後には、「パチパチパチパチ(拍手)、いいね d(^o)b(two thumbs up)」。ポジティブなフィードバックは、受け入れられてもらっていると感じられていい。

「ウェルビーイング」とは、「持続的な幸せな状態」を言うとのこと。価値観が大きく変化している今、教育現場にたつ教師や学生の心の状態が大切であり、「関わり」の中で生きている私たちは、自分という「個」だけではなく、自分が向き合う相手としての「個」のためにも、それぞれが「ウェルビーイング」な状態であることが大切だということだった。

セッション中には、さらに2回「ウェルビーイング・カード」を用いたグループワークがあった。「ウェルビーイング・カード」とは、研究によって幸福度との関連が証明されているカードだそう。セッションでは、「笑顔でいる秘訣」、「やってみようとワクワクしていること」について共有した。

その中で、笑顔は伝播する、だからこそ教師として笑顔でいることを心がけている、またコロナが始まってからパンをよく作っているというエピソードもあった。生活の中のモヤモヤを、パンをこねて解消しているというお話だったが、自分のイライラポイントをわかっていることは「ウェルビーイング」にとって非常に大事である。また、苦労や難しいことがあったとしても、それがワクワクに繋がっているという話もあった。ワクワクに繋がっていることがわかっているのといないのでは、心持ちがだいぶ違う。

セッションの最後に、Mentimeterを使ってこのセッションでの気づきをシェアした。出てきたのは、「笑顔」、「感謝」、「誰かのため」。私たちがこうやって研究会に参加しようとするのは、みんなで新しい気づきを得てワクワクし、それに感謝し、またそれぞれの現場で学習者や同僚に笑顔を届けるためなのかもしれない。

<セッション3> 「トキメキの国のALCE」

セッション3では、言語文化教育研究学会の交流委員会、企画委員会、そして研究集会委員会それぞれが、どのような思いをもって企画・運営しているのかを各委員会の委員が語り、それをもとに参加者のみなさんと「トキメキのたね」を探しにいった。

まず、三つの委員会から活動の説明があった。

交流委員会は、学会という概念を変えたい、もっと門戸を広げたいと考えて活動をしてきたが、本当に聞いてほしい人が学会発表の場にはいないこと、学会に柵があるように感じてきた。交流委員会の活動であるヒューマンライブラリーは、だからこそ対話を重視し、社会的弱者と位置付けられる人、また誰の中にもあるマイノリティ性にスポットをあて、普段スポットライトを浴びる機会がすくなくない「本」について話す、聞く、知る、近づくという活動に取り組んでいる。自分が特権をもったマジョリティなのではないか、人々の立場を知り、自分の立場がどういふものなのかを振り返る、そんな活動を行なっている。

企画委員会は、例会と特別企画の運営をしている。企画委員会では、それこそだれかの胸の中にある「トキメキのたね」を一緒に見つけ出し、それを大事に、そしてアツク(!)形にしていきたいと思っている委員会である。その場で出てきた即興的なやりとりが、別の企画につながる…それを話題提供者と楽しもう！という意気込みが伝わってきた。

研究集会委員は、テーマをもとに、教育課題をさまざまな形で議論していく会である。議論の仕方や仕掛けを企画するというよりは、ともに研究集会を作っていこう、対話していこうという気持ちの強い委員会である。後藤副委員長からは、言語教育系の人を、学校教育や教科教育、社会科教育に引きずり込みたい！という思いも共有された。

そしてこの後、本セッションに参加している全員での対話へ。
二つ大きなテーマが出てきた。

ひとつは「マジョリティ性」について。マジョリティ性を持っている人、特権を持っている人は、持っていることに気づかない。こういった話はもうすでに多くされていて、マジョリティ性を教えるということも起きているが、具体的な問題を解決していくためには、制度を変える、または日本語教育も教員課程を変えていくなど、何か考えていかないといけないのではないか、そして、違う価値観を認め、どうやって合意形成を作ることができるようになるのかという議論にシフトしていくべきなのではという意見があった。

もうひとつは、教科教員と日本語教育をつなげることができないか、国語教育と日本語教育の協力体制が現場では見られないが、それはどうしてだろうかという問いかけだった。海外ルーツを持つ子供たちへの日本語教育を考える際にも、垣根を超えて、例えば小学校教員と日本語教師、お互いの専門的な知見を共有し合っていくことが有益であることは明白であるにもかかわらず、なかなか現場での連携は見られない。ただ、この状況は学校教育だけでなく、まちづくり、例えば子育て支援や介護などの場においても同じだという意見もあった。その場や状況に身を置いている個が、どうしたら「当事者」として関わっていくようになるのか、また人々を巻き込んでいくにはどうしたらいいのか、制度を作ったらいいのか、どんなやり方があるのだろうか…

というところで時間が来てしまった。しかし、このセッションで、次の「トキメキ・チャレンジ」が見つかったようである。ん？「トキメキ・チャレンジ」？あれ、セッション1に戻ってきたではないか。ということは、次はとにかくやってみる、ということだろうか。行動していく中で、その場や状況に関わる当事者のみなさんと対話をしながら「発見」や「驚き」を共有できれば、またその一歩先へ、ともに歩みを進めていけるのではないか？大きなテーマにどうやってアプローチするのか、ちょっと気持ちが重かったが、最後に少し明るい気持ちで終わることができた。これが「トキメキ」の力？！なのか？！

二日目に続く…

8月29日(日)第2日目報告

両角 遼平(広島大学大学院)

研究集会2日目は3つのセッションが行われました。

1日目のセッション1～3の流れを経て、「トキメキ」について学問的に・批判的に・省察的に考えました。

<セッション4> メルロ＝ポンティでときめく！？—メルロ＝ポンティの言語論と思考と言語の表現活動—

2日目は、西口光一先生による「メルロ＝ポンティでときめく！？」からスタートしました。このセッションは、話題提供者である西口先生がまさに今ときめいている問題関心から立ち上がったものです。これまで「当事者中心の言語教育」を志し、研究としてはヴィゴツキーやバフチンに着目して言語の現実を考究してきた西口先生。そんな西口先生が最近注目しているメルロ＝ポンティの言語論について、セッションの前半で話題提供をしていただきました。後半では、話題提供を踏まえて、メルロ＝ポンティの言語論を下敷きとしつつ、大きくは2つの論点についてディスカッションを行いました。

- ・論点1 教養ある言語ユーザーに対して新たな言語の上達を支援しようと企画し実践する場合に、各々の習得段階で、どのような事実性の地平あるいは意識の地平(言語活動従事の「土俵」のようなもの)を設定して支援を展開するのが有効か。
- ・論点2 学習者を世界内存在として捉えた場合に、「文化」をどのように捉えるか。また、「文化」を扱う必要があるか。あるとすれば、どのような目的でどのように扱うか。

参加者からは、「主観・客観の乗り越えの先に何があるのか?」「身体の反応を生み出す機構になっているシンボル化機能とは、具体的にはどうゆうことか?」「所作と言語的所作の逆転現象とは?」など、メルロ＝ポンティの言語論への興味深い質問が投げかけられました。このセッションに惹かれて研究集会に参加したという参加者の方も多くおり、グループでのディスカッションや西口先生とのやり取りが活発に行われました。

セッション4を通して、1つの姿勢が貫かれていたように思います。それは、難しさの中に「トキメキ」を見出すことです。学問的な探究の過程には、容易に答えの出せない問いやすんまり理解することのできない先人の論考・実践が待ち構えています。しかし、そのような難しさに向き合うことで、私たちの思考は働き、新たな気づきを得て、学問的な知が前進していきます。本セッションの90分間で、メルロ＝ポンティの言語論を詳細に理解することはおそらく叶わ

なかったでしょう。しかし、メルロ＝ポンティの言語論の入り口に立つことはできたのではないのでしょうか。今後、その入り口の扉を開き、メルロ＝ポンティの論考について深く立ち入っていく方もいれば、入り口に立っただけで引き返してしまう方もいるかもしれません。ただ、言語に携わる教育・研究に取り組む私たちが、その基盤にある「言語」というものに新たな知見から眼差しを向けてみる貴重な機会であったように思います。

<セッション5> ホンマにトキメかなアカンのですか

このセッションは、3月に行われたプレ企画をきっかけとして生まれました。プレ企画では、参加者の皆さんと色々なトキメキを語り合いましたが、「何でもトキメキと言ってしまうのではないか?」「トキメキって結局どんなものなのか?」という、その定義や本質らしきものが見えてきたり、反対によくわからなくなったりしました。このような「トキメキ」に対してのもやもやを大切に、第9回研究集会も終盤に差し掛かる中で、あえて「トキメキ」を少し疑ってかかるような挑戦的なセッションとなりました。

本セッションではまず、事前に参加者の皆さんから募集したトキメク場面を8つに厳選して作られた「トキメキ付箋」を、オンライン上のワークシート(トキメキターゲットモデル)に個人で位置付けました。トキメキターゲットモデルは3層の同心円で作られており、円の中心ほど強くトキメク、外側ほどトキメかない、同心円の外はトキメキ圏外として表現されました。個人で付箋をターゲットモデルに位置づけたら、ブレイクアウトルームに分かれて、3～4人の少人数のグループで、以下のディスカッションを行いました。

- 1)それぞれが「トキメキ付箋」をターゲットモデルのどこに置いたかを共有する。
- 2)トキメキのポイントはどこが違うか/同じか、なぜ違うのか/同じなのかを議論する。
- 3)どうしたらトキメクのか、グループで「トキメキ3条件」を挙げる。

各グループがつくったターゲットモデルを全体で共有してみると、「なぜ他のグループはこの付箋をその位置に置いたのだろうか?」などのグループ間の違いに注目が集まりそこからまたやり取りが盛り上がりました。また、最終的にグループごとでトキメキの条件を3つにまとめました。あえて条件にまとめてみると、「思いがけない」「熱中」「充実」「うれしい」「準備ができてい」「積み重ね」など、似ているような条件、または相反するような条件が様々に挙がりました。「トキメキ」を感じる時・状況・対象などが人それぞれに異なることが浮き彫りになる一方、この条件は、「トキメクことが私に何をもたらすのか」をも表していたように思います。このようにセッション5では、私がトキメク条件を探ることを通して、「ホンマにトキメかなアカンのか」を捉え直す機会となりました。

Refreshing Time Yoga

セッション5と6の間には、秋田大学の濱田典子先生によるヨガを楽しむ時間が設けられました。オンラインでの研究集会では、パソコンなどの画面の前で長時間同じ姿勢をとりがちになります。また、ここまでのセッション4と5を通して、3時間ほど頭も使いっぱなしでした。ヨガを通して、一度体と頭をリフレッシュすることができました。

<セッション6> 私と学会の関係を捉え直すトキメキ学会参加するために

2日目最後は、若手による企画から立ち上がったセッションでした。大学院生である両角と小栗優貴さん(広島大学大学院)は、「若手」として様々な学会や研究会に関わる中で、「なぜ若手研究者の参加が少ない(と感じてしまう)のだろうか?」という寂しさを感じていました。「若手」の方々に話を聞く中、それまでの学会参加経験から、自己の肯定感や効力感を感じづかったこと、そして他の参加者などからの応答性が低かったことを理由に、参加意欲が減退していった姿が見えてきました。このセッションでは、①学会が抱える参加意欲が生まれづらい環境と②既に構築されている社会(学会)に新参者として加わることの難しさの2点を問題としつつ、「私たちが研究や教育実践に感じた“トキメキ”を大切にしながら、学会というコミュニティにどのように参加していけるだろうか?」というやや大きなテーマについて、参加者のみなさんと考えました。

はじめに、参加者のみなさんがイメージする「私と学会とトキメキ」をイラストや文章で描いてみるアクティビティを通して、これまでの私と学会を振り返ってみました。続いて、「社会」へ“参加”すること(civic engagement)についての研究を取り上げながら、学会に“参加”するとはどういうことなのかを話題提供者からお話しました。そして、学会とは異なる研究組織との比較を通して学会の仕組みの問題点はどこにあるのかを、再度話題提供者から提示しました。

ここまでの内容を踏まえて、参加者の皆さんに「これからの私と学会とトキメキ」をイラストや文章で描いてもらいました。そして、そのイメージの共有を通して、「私たちが研究や教育実践に感じた“トキメキ”を大切にしながら、学会というコミュニティにどのように参加していけるだろうか?」についてディスカッションを行いました。セッションの最後では、変化の激しい今・これからの学会に、私(たち)はどのように“参加”していくのか、について全体で意見を交わしました。

セッション6では、参加者がそれぞれの立場や所属を超えて、学会のあり方について語り合いました。その中には、「学会は学問について喧々諤々と意見を戦わせる場であり、本来そこに

は若手もベテランもない」という意見や「オンラインでの勉強会やセミナーも増える中で、学会ももっと参加しやすい場にしていけないだろうか」といった悩みも吐露されました。このように、学会とはどうあるべきか(学会のあり方)と学会が今どうなっているか(学会のあり様)の間で、社会の変化に学会は向き合っているだろうか？を問い直す機会となりました。本セッションで交わされた意見や悩みは、特定の学会だけの話ではないかもしれません。今後も「私と学会」の関係や、学会のあり方とあり様について、多様な立場の方々との対話を通して問い続けていくことは大切であるように思いました。